厚生労働行政推進調査事業費補助金（肝炎等克服政策研究事業）
総括研究報告書

ソーシャルメディア等を活用した肝炎ウイルス感染者の偏見差別の解消を目指した研究

研究代表者　八橋　弘　独立行政法人国立病院機構長崎医療センター　副院長

研究要旨

本研究では、偏見や差別の解消のために、既存の方法に加えソーシャルメディア等を活用した方策の有効性を検討する。特に、肝炎患者と関わることが多い医療機関等においての啓発や、高校生等の若年層への啓発方法について検討をおこなう。

1. 肝炎ウイルス感染者への偏見差別を防止する為の事例集､解説集を内容とするホームページ

令和 2 年度は、ホームページの内容について、研究班の紹介、偏見差別を防止するための事例集・解説集の紹介、ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラム、交流広場、様々な情報提供する場、の案を作成し、偏見差別を防止するための事例集・解説集を作成した。ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラムについてはホームページの中に作り込みをおこなった。

令和 3 年度は、ホームページを作成し、2021 年 8 月 1 日に HP の公開をおこなった。2022 年 2 月末までに 1200 名が HP の閲覧アクセスをおこない、理解度を自己学習するプログラムには 2022 年 3 月末までに 335 名が参加していた。

2. 偏見・差別の地域差を考慮した上での公開シンポジウム

令和 2 年度は、公開シンポジウムを全国 2 か所でおこなう予定であったが、新型コロナウイルス感染の影響により開催できなかった。研究班初年度に開催できなかった分、2 年目後半、3 年目にシフトさせて、Web 方式での開催も考慮しながら開催を予定した。

令和 3 年度は、2022 年 3 月 6 日に東京駅近くの会議場で実施した。計 40 名近くの患者やその家族、市民や医療従事者が参加し、肝炎患者の偏見差別の問題について問題提起、事例紹介、今後の課題などについて活発な意見交換をおこなった。

3. ウイルス性肝炎に対する治療の進歩を考慮した上での偏見差別や患者 QOL に関した患者アンケート調査

令和 2 年度は、患者調査の項目を検討し、アンケート内容を確定した。

令和 3 年度は、患者アンケート調査を実施した。肝炎に感染していることで偏見差別を受けるなどいやな思いをしたことがある者の頻度は、16.1%で、「いやな思いをしたことがある」と回答した者の特徴として、C 型肝炎患者よりも B 型肝炎患者で、男性よりも女性で、高齢者よりも若年者に多いという特徴がみられた。しか

しながら、「いやな思いをしたことがある」と回答した者を対象として、それは過去のことですか、現在も続いている話か尋ねたところ、82.2%が過去のことであると回答していた。偏見差別の経験は過去のことであると回答した者が多いことが今回初めて明らかとなった。また、肝炎に感染していることで、いやな思いをしないように気をつけている者の頻度は、34.3%であった。これは、過去にも現在においても「いやな思いをしたことがある」という経験のない者においても、日常生活で、いやな思いをしないように気をつけている者が少なくないことを示している。肝炎患者のこれらの心の状態、心理模様については、今後十分検討する必要があると考えられた。

令和３年度の本アンケート調査結果は中間集計であり、令和４年度には最終報告をおこなう予定にしている。

研究分担者

四柳　　宏　東京大学医科学研究所・先端医療研究センター感染症分野・教授

磯田　広史　佐賀大学医学部附属病院・肝疾患センター・助教

是永　匡紹　国立国際医療研究センター・免疫研究センター・肝炎情報センター・肝疾患研修室長

米澤　敦子　東京肝臓友の会・事務局長

中島　康之　東京肝臓友の会／全国B型肝炎訴訟大阪弁護団・恒久対策班事務局長

梁井　朱美　東京肝臓友の会／全国B型肝炎訴訟九州原告団

及川　綾子　東京肝臓友の会／薬害肝炎全国原告団・薬害肝炎東京原告団代表

浅井　文和　日本医学ジャーナリスト協会・会長

研究協力者

山﨑　一美　独立行政法人国立病院機構長崎医療センター　肝臓内科、臨床研究センター

A. 研究目的

A-1. 研究の背景

肝炎対策基本法に基づき、「肝炎対策の推進に関する基本的な指針」が策定された。その指針には、肝炎ウイルスの感染者および肝炎患者に対する不当な差別が存在することが指摘されている。平成 23 年度から３年間、龍岡資晃元学習院教授による「肝炎ウイルス感染者に対する偏見や差別の実態を把握し、その被害の防止のためのガイドラインを作成するための研究」班が組織され研究が実施された。また、平成 28 年には指針の改定が行われ、肝炎患者等に対する不当な差別や、それに伴う肝炎患者等の精神的な負担が生じることのないよう、正しい知識を身に付け、適切な対応に努めること、などが明記された。

平成29年度から3年間は、「肝炎ウイルス感染者の偏見や差別による被害防止への効果的な手法の確立に関する研究」班（研究代表者：八橋　弘）が組織され下記の内容の研究が実施された。①肝炎ウイルス感染者の偏見や差別による被害の実態を明らかにした。②看護学生、医学部学生及び病院職員を対象としたウイルス肝炎の感染経路及びウイル

ス肝炎の感染性についての理解度に関する調査をおこなった。③肝炎患者への偏見差別を考える公開シンポジウムを福岡、札幌、大阪、東京、那覇、広島、仙台、佐賀で開催した。肝炎ウイルス感染者の偏見差別に関する座談会集を作成した。

今までの政策研究で実施された肝炎患者に対する偏見や差別に関する調査によって、その実態は明らかになった、それらをどのように伝え、偏見や差別を解消するための方策につなげていくかについては十分な検討がなされていない。

A-2. 研究目的

本研究では、偏見や差別の解消のために、既存の方法に加えソーシャルメディア等を活用した方策の有効性を検討する。特に、肝炎患者と関わることが多い医療機関等においての啓発や、高校生等の若年層への啓発方法について検討をおこなう。

B. 研究方法

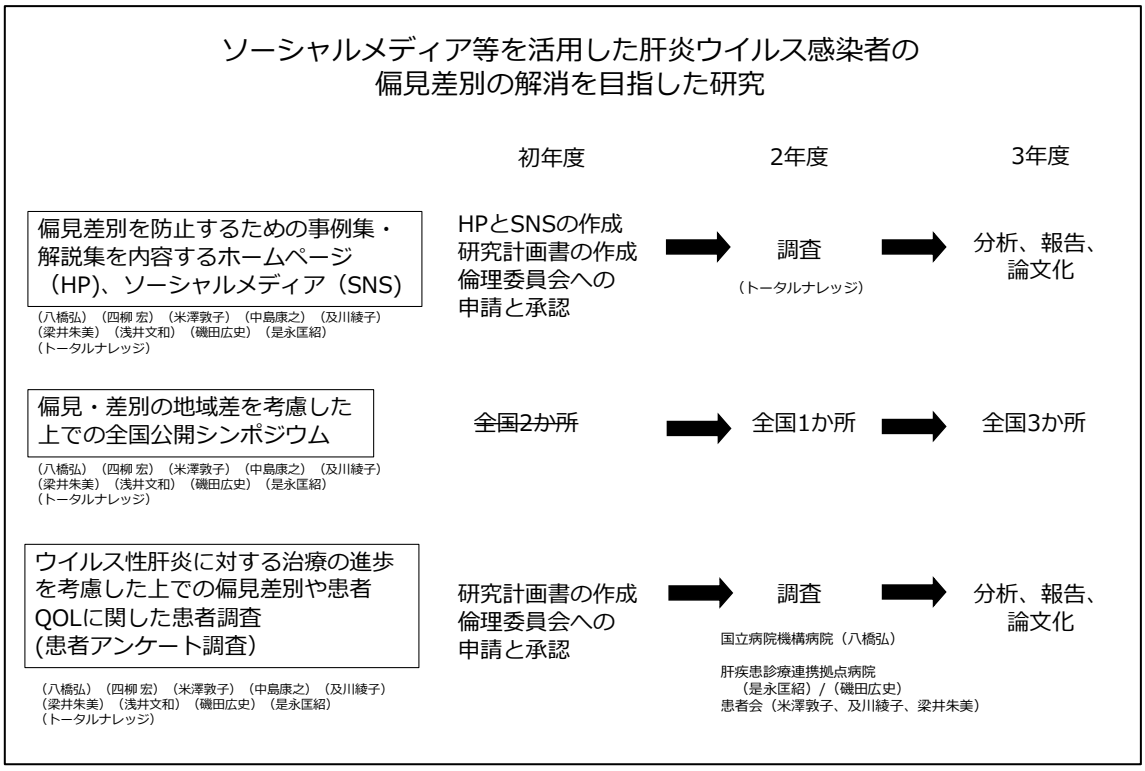
本研究班では、主に下記の3点について

B-1. 肝炎ウイルス感染者への偏見差別を防止する為の事例集、解説集を内容とするホームページ（ＨＰ）、ソーシャルメディア（ＳＮＳ）を作成して一般公開をおこなう。

B-2. 偏見・差別の地域差を考慮した上での公開シンポジウムを開催する。

B-3. ウイルス性肝炎に対する治療の進歩を考慮した上での偏見差別や患者QOLに関した患者調査をおこなう。

（概要図）



C. 研究結果と考察

C-1. 肝炎ウイルス感染者への偏見差別を防止する為の事例集、解説集を内容とするホームページ（ＨＰ）、ソーシャルメディア（ＳＮＳ）の作成

令和２年度は、ホームページの内容について、研究班の紹介、偏見差別を防止するための事例集・解説集の紹介、ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラム、交流広場、様々な情報提供する場、の案を作成し、偏見差別を防止するための事例集・解説集を作成した。ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラムについてはホームページの中に作り込みをおこなった（**資料 1**）。取り上げる偏見差別の事例の選択や問題解決の方法などについては班員の中で慎重に議論をおこないながら検討をおこなった。ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラムについてはホームページ上でも統計学的な処理を施し参加者が興味を示す工夫をおこなった。

HP 内に、研究班の紹介、偏見差別を防止するための事例集・解説集の紹介、ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラム、交流広場、様々な情報提供する場を作成するとともに、偏見差別を防止するための事例集・解説集を作成した（**資料１）。**また、ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラムについてはホームページの中に作り込みをおこなった。ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラムについてはホームページ上でも統計学的な処理を施し参加者が興味を示す工夫をおこなった。

2021 年 8 月 1 日に HP の公開をおこなった。2022 年 2 月末までに 1200 名が HP の閲覧アクセスをおこなっ た。理解度を自己学習するプログラムには 2022 年 2 月末までに 335 名が参加していた。

C-2. 偏見・差別の地域差を考慮した上での公開シンポジウムの開催

令和２年度は、偏見・差別の地域差を考慮した上での公開シンポジウムを全国 2 か所でおこなう予定であったが、新型コロナウイルス感染の影響により開催できなかった。患者やその家族、市民や医療従事者の参加可能な公開シンポジウム開催の意義は大きいことから、研究班初年度に開催できなかった分、2 年目後半、3 年目にシフトさせて、Web 方式での開催も考慮しながら開催を予定した。

令和 3 年度も、当初 3 か所で実施する予定であったが、引き続き新型コロナウイルス感染流行の影響により、年度前半から思うように開催できない中、感染の流行が沈静化し始めた 2022 年 3 月 6 日に東京駅近くの会議場で実施した（**資料 2**）。計 40 名近くの患者やその家族、市民や医療従事者が参加し、肝炎患者の偏見差別の問題について問題提起、事例紹介、今後の課題などについて活発な意見交換をおこなった。なお、公開シンポジウム参加者は、通常の健康管理対策や感染対策に加えて、事前に唾液検体を用いたコロナ診断の定性キットでコロナ陰性を確認して参加された。

C-3. ウイルス性肝炎に対する治療の進歩を考慮した上での偏見差別や患者 QOL に関した患者アンケート調査

令和２年度に、ウイルス性肝炎に対する治療の進歩を考慮した上での偏見差別や患者

QOL に関した患者調査の項目を検討し、アンケート調査内容（**資料 3**）を確定させた後に、令和 3 年度は研究計画書を作成し 2021 年 6 月 7 日の倫理審査委員会の承認をえた（承認番号 2021023）。その後、国立病院機構病院、肝疾患診療連携拠点病院に通院中の患者を対象にアンケート用紙を配布し、その後回収を行い、集計をおこなった（**資料 4.資料 5**）。

2021 年 6 月 7 日から 2021 年 11 月 1 日までの中間集計結果について報告する。調査施設数は、国立病院機構 33 施設、肝疾患診療連携拠点病院 8 施設の計 41 施設である。この期間中に 5440 名の肝疾患患者にアンケート用紙を配布して、うち 1304 名（23.9%）から回収できた。1304 名の背景因子を**表 1** に示す。肝炎に感染していることで偏見差別を受けるなどいやな思いをしたことがありますかという設問に対して、921 名から回答がえられ、特に無いと回答した者は 719 名（83.9%）、「いやな思いをしたことがある」と回答した者は 138 名（16.1%）であった（**図 1**）。「いやな思いをしたことがある」と回答した者の特徴として、C 型肝炎患者よりも B 型肝炎患者で、男性よりも女性で、高齢者よりも若年者に多いという特徴がみられた（**図 2.図 3**）。

表 1

アンケート回答者(N=1304)の背景因子(1)

原因別

C型肝炎	444(34%)
B型肝炎	466(36%)
B/C以外	383(29%)
B型及びC型肝炎	11(1%)
合計	1304

病態別

1. 慢性肝炎	636(48%)
2. 肝硬変	232(18%)
3. 肝がん	197(15%)
4. キャリアー	146(11%)
5. 脂肪肝、非アルコール性脂肪肝炎(NASH)	115(9%)
その他	176
無回答	51
合計	1553

図 1

C-2 肝炎に感染していることで、差別を受けるなど、
いやな思いをしたことがありますか。
（B型肝炎444 人、 C型肝炎466人、B型・C型肝炎11人、計921人）

*赤字は2012年調査時の頻度

選択項目	回答数	頻度	頻度（有効回答のみ）
1. 特に無い	719	78.1	83.9
2. いやな思いをしたことがある	138	15.0	16.1
無回答	64	6.9	
合計	921	100.0	100.0

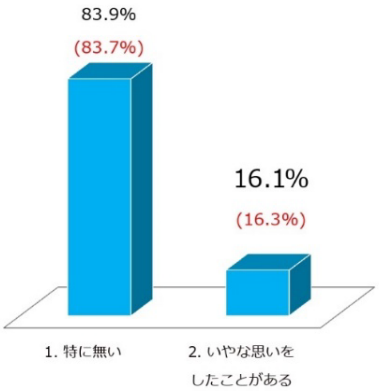


図 2

C-2 偏見差別 「いやな思いをしたことがある」の頻度の検討
417人のB型肝炎患者での男女別、年齢層別 ※人数は無回答を除く

*赤字は2012年調査時の頻度

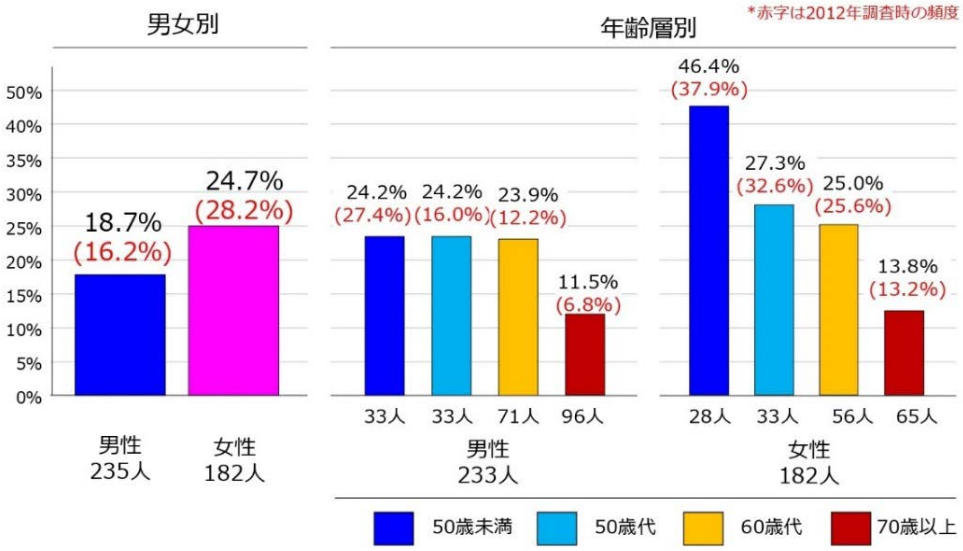
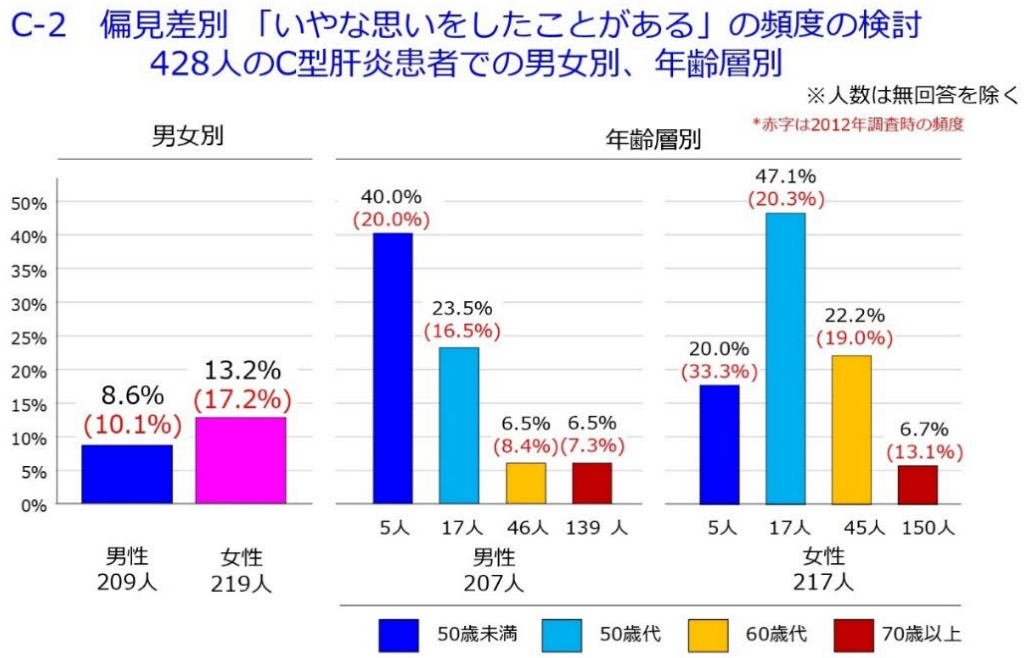


図 3

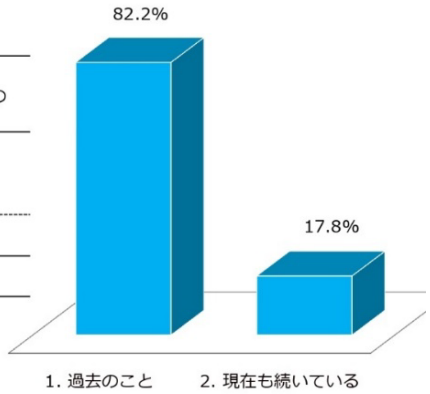


「いやな思いをしたことがある」と回答した 138 名を対象として、それは過去のことですか、現在も続いている話か尋ねたところ、111 名（82.2%）が過去のこと、24 名（17.8%）が現在も続いていると回答した（**図 4**）。

図 4.

C-2-1（前問で、「2　いやな思いをしたことがある」と答えた方にお尋ねします。）
そのことは過去のことですか、現在も続いている話ですか。
（B型肝炎89 人、 C型肝炎47人、B型・C型肝炎2人、計138人）

選択項目	回答数	頻度	頻度（有効回答のみ）
1. 過去のこと	111	80.4	82.2
2. 現在も続いている	24	17.4	17.8
無回答	3	2.2	
合計	138	100.0	100.0

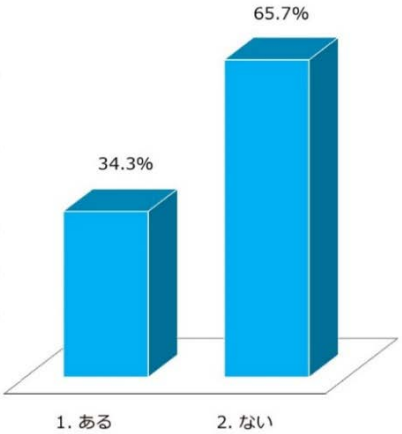


肝炎に感染していることで、いやな思いをしないように気をつけていることがあるか尋ねたところ、921 名中 247 名（34.3%）があると回答し、473 名（65.7%）はないと回答していた（**図 5**）。

図 5.

C-2-2 肝炎に感染していることで、いやな思いをしないように気をつけていることがありますか。（B型肝炎444 人、 C型肝炎466人、B型・C型肝炎11人、計921人）

選択項目	回答数	頻度	頻度（有効回答のみ）
1. ある	247	26.8	34.3
2. ない	473	51.4	65.7
無回答	201	21.8	
合計	921	100.0	100.0

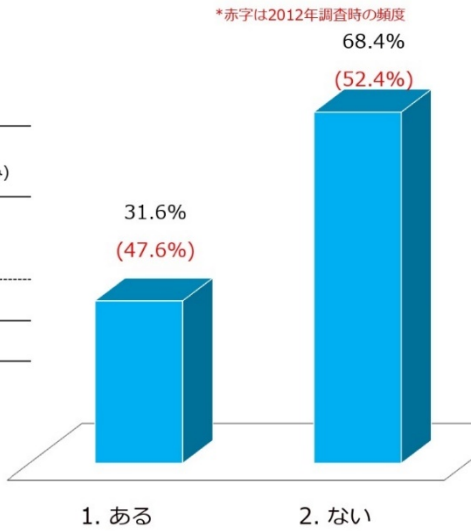


日常生活で、肝臓病を患っていることによる悩みやストレスがありますか、という設問に対しては、1304 名中 369 名（31.6%）はあると回答し、798 名（68.4%）はないと回答していた（**図 6**）。

図 6.

F-11 日常生活で、肝臓病を患っていることによる悩みやストレスはありますか。

選択項目	回答数	頻度	頻度（有効回答のみ）
1. ある	369	28.3	31.6
2. ない	798	61.2	68.4
無回答	137	10.5	
合計	1304	100.0	100.0



D. 結論

本研究では、偏見や差別の解消のために、既存の方法に加えソーシャルメディア等を活用した方策の有効性を検討する。特に、肝炎患者と関わることが多い医療機関等においての啓発や、高校生等の若年層への啓発方法について検討をおこなう。

1. 肝炎ウイルス感染者への偏見差別を防止する為の事例集、解説集を内容とするホームページ

令和 2 年度は、ホームページの内容について、研究班の紹介、偏見差別を防止するための事例集・解説集の紹介、ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラム、交流広場、様々な情報提供する場、の案を作成し、偏見差別を防止するための事例集・解説集を作成した。ウイルス肝炎の感染経路や感染確率についての理解度を自己学習するプログラムについてはホームページの中に作り込みをおこなった。

令和 3 年度は、ホームページを作成し、2021 年 8 月 1 日に HP の公開をおこなった。2022 年 2 月末までに 1200 名が HP の閲覧アクセスをおこない、理解度を自己学習するプログラムには 2022 年 3 月末までに 335 名が参加していた。

2. 偏見・差別の地域差を考慮した上での公開シンポジウム

令和 2 年度は、公開シンポジウムを全国 2 か所でおこなう予定であったが、新型コロナウイルス感染の影響により開催できなかった。研究班初年度に開催できなかった分、2 年目後半、3 年目にシフトさせて、Web 方式での開催も考慮しながら開催を予定した。

令和 3 年度は、2022 年 3 月 6 日に東京駅近くの会議場で実施した。計 40 名近くの患者やその家族、市民や医療従事者が参加し、肝炎患者の偏見差別の問題について問題提起、事例紹介、今後の課題などについて活発な意見交換をおこなった。

3. ウイルス性肝炎に対する治療の進歩を考慮した上での偏見差別や患者 QOL に関した患者アンケート調査

令和 2 年度は、患者調査の項目を検討し、アンケート内容を確定した。

令和 3 年度は、患者アンケート調査を実施した。肝炎に感染していることで偏見差別を受けるなどいやな思いをしたことがある者の頻度は、16.1%で、「いやな思いをしたことがある」と回答した者の特徴として、C 型肝炎患者よりも B 型肝炎患者で、男性よりも女性で、高齢者よりも若年者に多いという特徴がみられた。しかしながら、「いやな思いをしたことがある」と回答した者を対象として、それは過去のことですか、現在も続いている話か尋ねたところ、82.2%が過去のことであると回答していた。偏見差別の経験は過去のことであると回答した者が多いことが今回初めて明らかとなった。また、肝炎に感染していることで、いやな思いをしないように気をつけている者の頻度は、34.3%であった。これは、過去にも現在においても「いやな思いをしたことがある」という経験のない者においても、日常生活で、いやな思いをしないように気をつけている者が少なくないことを示している。肝炎患者のこれらの心の状態、心理模様については、今後十分検討する必要があると考えられた。

令和 3 年度の本アンケート調査結果は中間集計であり、令和 4 年度には最終報告をおこなう予定にしている。

E. 健康危険情報

なし。

F. 研究発表

１．論文発表

２．学会発表

2022 年 3 月 18 日の肝炎対策推進協議会で、本研究班の活動報告をおこなった。

G. 知的財産権の出願・登録状況

１．特許取得

なし。

２．実用新案登録

なし。

３．その他

なし。